中高年期の well-being と危機¹

——老いと自己評価の関連から——

若本純子 お茶の水女子大学² 無藤隆 白梅学園大学

**“The paradox of well-being” and “the crisis” in middle and late adulthood:
Examination from the relationship between aging and self-evaluation**

Junko Wakamoto (*Ochanomizu University*) and **Takashi Muto** (*Shiraume Gakuen University*)

The present study focused attention on “the paradox of well-being” and “the crisis” of aging discussed in the previous studies, and examined the developmental characteristics of middle and late adulthood regarding the relationship between subjective experiences of aging and domain-specific self-evaluation. A questionnaire survey was conducted to 2026 thirty through 75-year-old participants. Within a cross-sectional model, “the paradox of well-being” was verified. It was suggested that aging is a pivotal component of well-being for the middle-aged and elderly. “Leeway and maturation,” a positive aspect of subjective aging experience, showed positive and far-reaching impacts on self-evaluation. Its function to limit and minimize the negative effect caused by decline was also suggested. The crisis, for men, found in early and post middle-age, was explained as the accumulation of negative effect of aging, mainly relating to the socioeconomic changes. For women, the crisis was inferred to be elicited as a negative impact of aging that spilled over to most facets of self throughout middle and late adulthood.

Key words: middle and late adulthood, subjective experiences of aging, self-evaluation, “the paradox of well-being”, “the crisis” of aging.

The Japanese Journal of Psychology
2006, Vol. 77, No. 3, pp. 227-234

成人発達研究では、人生後半が、それまでには見られなかった自己の体力や身体機能の衰え、社会的な限界の認知、死への直面などの影響下にあることが認められている (Lachman & Bertrand, 2001; 岡本, 2002)。これらは老いをめぐる経験と換言できるであろう。発達は環境的・文脈的要求によって進展する (Baltes, 1987)。したがって、人生後半における発達は老いと相互作用の中で生じると言える。この点について、生涯発達の観点と力動論の観点では各々独自の議論を展開している。生涯発達の観点では、数多くの量的研究の成果から、人生後半は喪失や有限性の影響下にはあるものの、well-being が高水準を保つなど極めて適応的な時期とされる。Mroczek & Kolarz (1998) はこれを“well-being の逆説” (The paradox

of well-being) と呼んだ。この一見矛盾した事象を説明する理論モデルとして、例えば“補償を伴う選択的最適化” (Selective optimization with compensation; Baltes & Baltes, 1990) が挙げられる。これは、加齢に伴い衰えた領域に対して関与を停止したり、より優勢な領域やスキルによって代行するなどの補償的な対処によって well-being が維持されることを指す。他にも、衰えた現状に即した目標変更、対処方略の中心を“克服”から“調整”へと移行する (Brandstädter & Greve, 1994)、コントロールの様式を変える (Heckhausen, 2001) などの対処によって、人生後半においては高 well-being が維持・上昇するとされている。一方、力動論の観点では、アイデンティティ (岡本, 2002; Whitbourne, 2002) や生活構造 (Levinson, 1978) などの包括的・段階的な発達が、質的手法を中心とする検討を通して提唱されている。ここでは、人生後半固有の老いの経験が、それまでの人生を問い直し、自己を再構築する契機となること、その過程には“危機”が存在することが示されている。“危機”はリスクと混同されがちであるが、Erikson (1968) は、“危機”を crisis の語意に沿って人生の転

Correspondence concerning this article should be sent to: Junko Wakamoto, Shiraume Gakuen University, Ogawa-cho, Kodaira, Tokyo 187-8570, Japan (e-mail: ICF14968@nifty.com)

¹ 本研究における調査 2 はお茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム“誕生から死までの人間発達科学”平成 14 年度公募研究助成を受けて、調査 3 は平成 14 年度ユニバーサル財団研究助成 (研究代表者: 矢吹真理) を受けて実施された。

² 現所属: 白梅学園大学。

機として概念化し、リスク的な様相を想定しながらも、それに対する積極的な対応が発達を促進することを強調した。また、Levinson (1978) は、成人男性の面接調査から見出された繰返し現れる転機の時期を“過渡期”と呼び、そこでは現行の生活構造が揺らぐことによって一時的なリスク状態が生じることを示唆している。したがって、人生後半の“危機”とは、老いに伴う転機とそれに由来して生じるリスクと考えることができる。これら“well-being の逆説”と“危機”という知見は、各立場の焦点の違いから対立するようにも見えるが、いずれも老いを発達の契機としてとらえ、その過程と対処を重視する点では共通している。よって、双方の知見ともに、老いによって生まれる人生後半の発達の特徴を記述したものとして理解することが可能であろう。

このように、老いは人生後半の発達における重要な要素として位置づけられるが、昨今、老いを老化として一面的にとらえ、ネガティブな心理的影響を自明のこととする見方に対する批判が現れている (Carstensen & Freund, 1994)。実証レベルでも、例えば成人は、衰えと同時に、自身の価値の高まりや成熟といった肯定的なアイデンティティ体験をも報告し (岡本, 2002)、加齢に伴って生じる時間・経済・心理面での余裕や成熟の実感が、老年期の自尊感情にポジティブな寄与を示す (若本, 2003) など、老いが肯定的側面も含む多面的な経験であることが見出されている。しかし、老いの肯定面の発達の意義は未解明のままである。加えて、老いという生物学的・社会的変化が人生後半の発達にどのような作用をもたらすのかに対して直接的にアプローチする研究は意外に少ない。一方、老いの再考には、急速な長寿高齢化が、深刻な健康問題を持たない高齢者を生み出している (内閣府, 2004) 点へも注目が必要である。身体的・心理的な老化は 40 代の中年期に始まるとの知見 (Whitbourne, 2002) を踏まえると、中年期から 70 代半ばに至っては、漸進的・断続的に進行する軽微な老いを伴う時期として発達上の連続性を有するとの想定が成り立つ。真に老年期の課題に直面するのは 70 代中盤以降の老年後期であるとの示唆 (下仲, 1999) を加えると、老年前期は“ポスト中年期”とも言うべき延長された成人期との見方も可能である。だが、Heckhausen (2001) が指摘するように、従来の成人発達研究では、中年期と老年期との差異、および中年期内の差異や変化に関する明確な理解は得られていない。それは誰もが共通して経験する軽微な老いの影響についても当てはまる。

さて、老いは万人に経験されるという点では普遍的であるが、ある人はそれに落胆し、ある人は気にも留めない。これを、老いという文脈的要求によって生じる認知・行動の個人差ととらえるとき、老いとは認知

一行動過程を喚起する刺激であり、その過程が個人差を形づくると考えられる。近年、多面的かつ動的な認知構造である自己概念が、個人差を生み出す媒介過程の担い手として注目されている (遠藤, 1992)。中でも自己評価は、ネガティブな状況下における個人の行動に強い影響力をもつ要素であり (Campbell, 1990)、情緒や well-being と同様に成人のパーソナリティ発達と密接に関連する心理的資源である (Baltes & Baltes, 1990; Brandstätter & Greve, 1994; Lachman & Bertrand, 2001)。別途、自己評価は領域ごとに独立して付され、状況に応じて刻々と変化することが指摘されている (伊藤, 2002)。したがって、老いの心理的影響も領域ごとの自己評価において顕在化し、その様相は発達の特徴を内包すると考えられる。このような性質をもつ自己評価の適用により、多くの機能領域で個別に展開すると言われる成人発達 (Baltes & Baltes, 1990; Whitbourne, 2002) の過程を、個別のかつ詳細にとらえ得ると期待される。

そこで、本研究は、老いを人生後半固有の多面的性質をもつ文脈的要求 (Baltes, 1987) であり、発達に寄与する刺激要因と位置づけた上で、自己評価との関連から人生後半の発達の特徴を検討することを目的とする。検討は、この時期の特徴として注目されてきた“well-being の逆説”と“危機”を、老いと自己評価との関連によってとらえ直すことにより行うものとする。先行研究 (Brandstätter & Greve, 1994; Levinson, 1978; Mroczek & Kolarz, 1998; 岡本, 2002) の知見から、“well-being の逆説”は、加齢に伴い老いが進行するにもかかわらず、自己評価などの well-being の水準は上昇・維持する現象とされる。他方、中高年期における“危機”は、40 代・退職期を中心に、加齢による衰えや限界、喪失などの転機によって生じ、心理的リスクを伴う自己概念の再構築の過程としてまとめられる。“well-being の逆説”、“危機”双方の検討において、人生後半の中での発達のな低位区分が指標となるため以下のとおりとする。まず比較的軽微な老いの影響下にある一連の時期を“中高年期”と呼称する。そして、先行研究 (Heckhausen, 2001; 若本・無藤, 2004, 2006) において発達の差異が指摘されている中年前期 (40 代)、中年後期 (50—65 歳)、そして軽微な老いの影響下にあるという点で中年期との連続性が示唆される老年前期をポスト中年期 (66—75 歳) と設定する³。なお、老いは 40 代から始まる (Whitbourne, 2002) ため、統制群としてプレ中年期

³ 本研究は、軽微な老いの影響下に人生後半を連続した時期と見なし、一般に老年前期と呼ばれる時期をポスト中年期とする視点をもつ。そのため、本邦の生涯発達研究が、国勢調査などの行政上の年齢区分 (65 歳以上が老年期) に準じるのとは異なり、中年期に焦点をあてる先行研究 (Heckhausen, 2001; Lachman & Bertrand, 2001) に依拠した分類を採用している。

(30代)を対象に含める。これら枠組みに則り、以下の五つの仮説を検証する。“well-beingの逆説”に関して、仮説1：年齢の上昇に伴い、老いと自己評価がともに上昇あるいは維持する。仮説2：その形成機序の一つとして、老いの肯定面の有意な影響が認められる。一方、“危機”に関して、仮説3：中高年期特有の転機に伴う自己変容が見出される。仮説4：“危機”の一面としてのリスクが、衰え、退職などによって生じる自己評価に対するネガティブな影響として示される。仮説5：“危機”の現象は40代である中年前期と退職期である中年後期において顕著に見られる。ただし、その多くが専業主婦である中年後期女性では退職の影響は見出されない。

方 法

中高年期成人を対象に3回の質問紙調査を、郵送による個別依頼・個別回収によって実施した。

調査対象・時期 調査1 対象：30—65歳男女1800名。筆者の知人・友人、その紹介者。時期：2001年6—7月。回収：1020（回収率56.7%）。調査2 対象：コミュニティ在住の66—75歳男女1200名。N県A高校卒業者。A高校は地方都市（人口約24万人）の公立高校。対象者が在学中に学制改革によって5校が統合され設立。時期：2003年2月。回収：722（回収率60.2%）。調査3 37—60歳男女1500名。S県B高校卒業者。B高校は首都圏（人口約7万人）の公立高校。創立50年弱。時期：2003年6—7月。回収：347（回収率23.1%）⁴。

調査内容 (a)主観的老いの経験（若本, 2003）：26項目5段階評定。中高年成人誰もが経験する比較的小さい老いのエピソード4因子（身体の不調：項目例“疲れやすくなった”，“運動能力が低下した”など8項目，心理社会面の減退：項目例“今の流行にうとくなった”，“記憶力・理解力が低下した”など5項目，志向の転換：項目例“健康への関心が増した”，“自分らしさについて考えるようになった”など7項目，余裕と成熟：項目例“楽に生きられるようになった”，“経済的に余裕ができた”など4項目）からなる老い

を包括的にとらえる尺度。この数カ月に経験された程度を評定。(b)多面的自己に対する評価：16項目5段階評定（若本, 2003；若本・無藤, 2004）。領域個別的な自己評価を測定するために用いる。外見4項目からなる“外見的自己”，職業や役割など社会的側面3項目からなる“社会的自己”，性格，家族など個人の中核である心理社会面5項目からなる“内的自己”，日常生活の中で感じられる明細化されにくい自己概念のうち，健康，体力の2項目からなる“生活的自己（健康）”，経済，生活の2項目からなる“生活的自己（経済）”という5領域から構成される。この因子構造は，中高年期固有の発達的特徴を反映することが見出されている。“私の○○（自己の諸側面）”に対する満足程度として評定。

分析対象者 3回の調査で回答を得られた2089名のうち，年齢未記入，不完全回答のものを除外した2026名を分析対象とする。内訳は，男性プレ中年期148名，中年前期187名，中年後期202名，ポスト中年期378名，女性プレ期234名，前期263名，後期278名，ポスト期336名である。平均年齢は55.10歳。男性の87.9%，女性の74.2%が既婚者であり，全体の82.1%に子どもがある。また43.4%が2世代世帯，31.4%が夫婦世帯で生活している。就業者は男性の67.3%（ポスト期の有職率は34.2%），女性の49.2%，専業主婦は40.3%である。教育歴の平均年数は男性14.8年，女性13.7年である。

結 果

基礎分析

因子分析および合成変数の構成 主観的老いの経験と多面的自己に対する評価について，先行研究（若本, 2003）に基づき確認的因子分析を実施した。老い：GFI=.94, AGFI=.92, RMSEA=.05, 自己評価：GFI=.96, AGFI=.94, RMSEA=.05であり，適合と見なされた（豊田, 1998）。よって，先行研究どおり，主観的老いの経験では“身体の不調”，“心理社会面の減退”，“志向の転換”，“余裕と成熟”の4因子を，また，多面的自己に対する評価では“外見的自己”，“社会的自己”，“内的自己”，“生活的自己（健康）”，“生活的自己（経済）”の5因子を同定した。続いて，各因子の素点を合計し項目数で除したものを合成変数の得点とし α 係数を算出した。“身体の不調”(.77)，“心理社会面の減退”(.74)，“志向の転換”(.70)，“余裕と成熟”(.66)，“外見的自己”(.71)，“社会的自己”(.75)，“内的自己”(.73)，“生活的自己（健康）”(.76)，“生活的自己（経済）”(.70)，という結果が得られ，一定の内的整合性が認められた。

老いと自己評価の性差と独立性 老いと自己評価を用いて中高年期の発達を検討するにあたり，その概念

⁴ 3回の調査において大きく回収率に差が出たことについて説明を加える。調査1は，筆者の知人・友人・その紹介者を対象とし，直接的・間接的に了承を取り実施された。それに対して調査2，調査3は，名簿を用いて文書で調査協力を依頼した。本研究の調査は大学院生による個人調査として実施され，郵送調査だったため，もとより高い回収率は望めなかった。しかし，中でも，調査3のみが著しく回収率が低かったのは，調査3が中高年期成人に向けて首都圏で実施されたことに由来し，転居・異動が多く調査票が未着となってしまうこと，個人のプライバシーに対する考え方が鋭敏であるため，調査拒否が多かったことなどが背景要因として考えられる。ここから，本研究は，調査対象の同質性の点で限界をもつことを指摘しておく必要があろう。

的性質について確認しておく必要がある。第 1 は性差である。成人発達研究では、性分業やライフコース、資源の違いにより発達経路そのものが異なるとして (Gilligan, 1982 岩男監訳 1986; Helson, 1997), 性差への配慮が求められている (Lachman & Bertrand, 2001)。そこで全使用変数の性差を検討したところ, 古い全変数において ($14.93 \leq F \leq 48.44, p < .001$), また自己評価の“身体的自己”と“生活的自己 (経済)” ($7.95 \leq F \leq 63.29, p < .01$) において性差が確認された。ここから性による発達経路の違いがあると想定されたため, 以下の検討は男女別に行う⁵。第 2 に, 自己評価と老いとの関連を明確化する。老いを認知過程における刺激要因, 自己評価をその影響下にある認知過程として検討を行うには, 双方の間に一定の独立性があることが求められる。だが, 本研究で用いる老い及び自己評価は, いずれも多面的・主観的変数であり, 概念上の近似が懸念される。そこで古い 4 変数, 自己評価 5 変数の相関分析を男女別に実施し確認を行った。男女ともに“余裕と成熟”と“生活的自己 (経済)” (男性: $r = .42$, 女性: $r = .42$), “身体の不調”と“生活的自己 (健康)” (男性: $r = -.39$, 女性: $r = -.35$) の間に中程度の相関が見られた以外は弱い相関しか示されなかった ($-.28 \leq r \leq .28$)。上述した中程度の相関は, 老いが生じ評価の対象となる領域が共通するため生じたと了解される上に, 最大でも約 18% の分散が説明されるに留まった。ここから, 老いの各側面と領域別の自己評価との間には一定の独立性があると判断した。

老いと自己評価の年齢段階による差異

“well-being の逆説”, すなわち年齢の上昇に伴い, 老いと自己評価がともに上昇あるいは維持する (仮説 1) を検証するため, 古い 4 変数, 自己評価 5 変数を従属変数とする年齢段階による分散分析を男女別に実施した結果, すべての従属変数において年齢段階による差が見出された (Table 1)。post hoc 検定 (Tukey 法, $p < .05$) によると, 老いでは, 40 代である中年前期以降にそれ以前とは異なり老いの経験が一般的に増加することが見出された。また評価では, 中高年期の前半 (プレ・前期) と後半 (後期・ポスト) との間の有意差が示されることが多く, 高年齢群ほど高得点を示す傾向にあった。

老いが自己評価に与える影響

中高年期における自己評価は, 古いからのポジティ

ブ (仮説 2), ネガティブ (仮説 3, 4) 双方の影響下, 様々な領域における独自の影響過程が組み合わされ, “well-being の逆説”, “危機”と目される発達の様相を構成すると考えられる。そこで, 複数の側面からなる心理変数を従属変数とする分析に適した (Stevens, 2002) 多変量回帰分析を実施した (従属変数: 自己評価 5 変数, 説明変数: 古い 4 変数)。発達経路の男女の違い, そして年齢段階による影響過程の違いが想定されるため (仮説 3, 5), 性・年齢 8 群別に分析を行った⁶。多変量検定ではすべての群で有意な結果が得られ ($.51 \leq Wilks' \Lambda \leq .61, 3.75 \leq F \leq 13.39, p < .001$), 老いと自己評価との間に有意な関連性があることが見出された。更に, 単一変量の F 検定においても全従属変数で有意な回帰が示され ($3.61 \leq F \leq 39.74, p < .01$), 5 自己領域すべてが老いとの有意な関連に寄与していた。Table 2 の β 係数を概観すると, 老いのうち“余裕と成熟”は広範な正の影響を, “身体の不調”, “心理社会面の減退”, “志向の転換”は負の影響を示していた。また, 影響の様相は, 例えば男性のポスト期では, 老いの多側面からの影響が見出されるのに対し, 女性では“身体の不調”と“余裕と成熟”からの影響に限定されるなど, 性, 年齢段階, 自己領域によって特有であった。

考 察

本研究は, 先行研究において, 中高年期に特徴的な様相とされてきた“well-being の逆説”と“危機”を, 老いと自己評価との関連から検証した。事前に想定した五つの仮説とほぼ一致する結果が得られ, 老いが自己評価に及ぼす影響力および影響の範囲は発達の状況によって異なり, 各々が独自の様相を持つことが示唆された。以下では, 複数の分析結果を総合し, 先行研究との照合を経る中で, “well-being の逆説”と“危機”に基づいて中高年期の発達を考察する。

老いと自己評価からとらえた“well-being の逆説”

本研究では, “well-being の逆説”を自己評価などの well-being の水準が上昇・維持される現象とし (仮説 1), その背景要因として老いの肯定面の影響が見られる (仮説 2) と想定し検証した。分散分析によって (Table 1), 老い, 自己評価ともに高年齢群ほど高得点, すなわち, 加齢とともに老いの自覚は増し自己評価は上昇していた。ここから, 本研究においても, 横断モデルではあるが“well-being の逆説”と目される結果が認められたと言えよう。老いが自己評価に与える影響を調べた多変量重回帰分析 (Table 2) にお

⁵ 成人発達では, 社会文化的要因の影響も指摘されているが (Lachman & Bertrand, 2001; 下仲, 1999), 本研究に用いた変数では, 職業や子の有無, 教育歴, 婚姻歴, 居住状況による影響は性・年齢段階による群別の分析によって統制し得ることが確認されている (若本・無藤, 2004, 2006)。

⁶ 重回帰分析および多変量回帰分析に使用された説明変数間の相関はすべて中程度以下であり ($r \leq .58$), VIF 値の許容度に特に低い値が見られなかったため (Stevens, 2002), 多重共線性の影響はないと判断した。

Table 1
 老いと自己評価を従属変数とする年齢段階による一元配置分散分析結果および全変数 M (SD)

	男性		女性	
	F	post hoc 検定 ^{a)}	F	post hoc 検定 ^{a)}
古い				
身体の不調	13.76***	プレ<前期・後期・ポスト 前期<ポスト	34.35***	プレ<前期・後期・ポスト 前期<ポスト
心理社会面	20.45***	プレ<前期・後期<ポスト	26.80***	プレ<前期<後期・ポスト
志向の転換	3.88**	プレ<後期	11.41***	プレ<前期・後期・ポスト
余裕と成熟	41.95***	プレ・前期<後期・ポスト	55.48***	プレ<前期<後期・ポスト
自己評価				
外見的	4.48**	プレ・前期<ポスト	4.55**	プレ<後期・ポスト
社会的	14.8***	プレ<後期・ポスト	14.1***	プレ・前期<後期・ポスト
内的	10.6***	前期・プレ<ポスト 前期<後期	12.3***	プレ<前期・後期・ポスト 前期<ポスト
生活的（健康）	8.31***	プレ・前期<ポスト・後期	2.63*	
生活的（経済）	17.5***	プレ・前期<ポスト・後期	15.2***	プレ・前期<後期・ポスト

	男性				女性			
	プレ	前期	後期	ポスト	プレ	前期	後期	ポスト
古い								
身体の不調	2.84 (.67)	3.09 (.68)	3.11 (.68)	3.26 (.70)	2.95 (.65)	3.29 (.67)	3.42 (.65)	3.52 (.75)
心理社会面	3.09 (.68)	3.34 (.65)	3.39 (.69)	3.59 (.68)	3.19 (.73)	3.40 (.75)	3.64 (.66)	3.67 (.71)
志向の転換	2.83 (.65)	2.92 (.64)	3.06 (.70)	2.98 (.68)	2.87 (.72)	3.10 (.64)	3.18 (.59)	3.17 (.72)
余裕と成熟	2.43 (.66)	2.48 (.65)	2.87 (.71)	3.01 (.67)	2.53 (.69)	2.77 (.75)	3.16 (.71)	3.21 (.71)
自己評価								
外見的	3.31 (.65)	3.34 (.64)	3.47 (.60)	3.48 (.56)	3.02 (.74)	3.13 (.76)	3.22 (.74)	3.23 (.72)
社会的	3.32 (.74)	3.35 (.74)	3.61 (.62)	3.65 (.58)	3.28 (.76)	3.41 (.76)	3.57 (.60)	3.62 (.58)
内的	3.54 (.60)	3.50 (.64)	3.66 (.58)	3.75 (.48)	3.41 (.68)	3.57 (.62)	3.61 (.59)	3.72 (.55)
生活的（健康）	3.01 (.92)	3.07 (.89)	3.36 (.90)	3.34 (.90)	3.15 (.93)	3.10 (.95)	3.28 (.96)	3.29 (.97)
生活的（経済）	3.15 (.98)	3.09 (.89)	3.52 (.74)	3.52 (.73)	3.24 (.91)	3.27 (.89)	3.58 (.82)	3.61 (.77)

^{a)} post hoc 検定は、TUKEY 法 ($p<.05$) にて実施した。

*** $p<.001$, ** $p<.01$, * $p<.05$

いて、老いの肯定面である“余裕と成熟”は、年齢、性、自己の領域を超える広範囲でポジティブな影響を示した。前期・後期・ポスト期で“余裕と成熟”から“生活的自己（経済）”に対する係数が最大値を示したこと、加えて“余裕と成熟”が老いの中で唯一年齢段階と中程度の正の相関を示し（男性： $r=.35$ 、女性： $r=.34$ ）、加齢に伴いその経験が増すと示唆されることを勘案すると、“余裕と成熟”に代表される老いの肯定面は、高年齢者の自己評価の高さを説明する有力な規定因と考えられる。一方、ネガティブな影響をもつ老いの3側面のうち、衰えの2相“身体の不調”、“心理社会面の減退”は、衰えが現れやすい外見・健康両面の身体領域に（男性でより顕著），“志向の転換”はライフコース上の変化が反映されやすい社会経

済的領域に対する影響のみが有意な傾向にあった。すなわち、老いのネガティブな影響は、老いの各側面が持つ性質との関連の強さが窺える自己の領域に限定されていたと言える。これは、老いのネガティブな影響は限局化によって最小化され、高 well-being を側面から支えているともとらえ得る。したがって、老いの各側面はその性質と特徴に応じた形で中高年期の高 well-being に寄与していると考えられるであろう。

老いと自己評価からとらえた“危機”

本研究では、“危機”を、中年前期と退職期に見られる（仮説5）中高年期特有の転機（仮説3）、および衰えや退職などの社会的変化に直面することによって生じる自己評価の低下（仮説4）と見なし検証した。

Table 2
自己評価を従属変数、老いを説明変数とする多変量回帰分析結果 (β 係数)

従属変数	説明変数	男				女			
		プレ	前期	後期	ポスト	プレ	前期	後期	ポスト
外見的	身体の不調	-.27*	-.35***	-.36***	-.21**	-.15	-.21**	-.12	-.36***
	心理社会面	.00	.17*	.04	-.14*	-.22**	-.32***	-.26***	-.10
	志向の転換	-.17	-.19*	.12	-.08	-.05	.00	.05	.11
	余裕と成熟	.23**	.32***	.01	.14**	.19**	.23***	.10	.18***
社会的	身体の不調	-.06	-.12	-.11	-.01	-.01	-.22**	-.03	-.28***
	心理社会面	-.13	.04	.03	-.22***	-.14	.01	-.28***	.02
	志向の転換	-.14	-.22**	-.23*	-.12*	-.28***	.00	-.15*	.04
	余裕と成熟	.30**	.31***	.28***	.19***	.22**	.27***	.20**	.23***
内的	身体の不調	-.16	-.18*	-.06	.03	-.07	-.06	.01	-.24***
	心理社会面	-.11	-.02	-.05	-.17**	-.08	-.30***	-.34***	-.12*
	志向の転換	-.16	-.24**	-.16	-.19**	-.27***	-.06	-.10	-.04
	余裕と成熟	.34***	.34***	.24**	.24***	.31***	.29***	.26***	.33***
生活的 (健康)	身体の不調	-.47***	-.49***	-.44***	-.45***	-.42***	-.27***	-.25***	-.48***
	心理社会面	-.04	.23**	.04	-.03	-.01	-.24**	-.24**	.09
	志向の転換	.05	-.08	-.04	-.07	.18*	-.04	-.06	-.03
	余裕と成熟	.32***	.32***	.12	.24***	.06	.30***	.28***	.23***
生活的 (経済)	身体の不調	-.24*	-.12	-.16	.00	-.09	-.28***	-.09	-.16*
	心理社会面	-.02	.03	-.02	-.18**	-.02	.03	-.21**	.05
	志向の転換	-.09	-.26**	-.24**	-.17**	-.21**	-.14*	-.18**	-.09
	余裕と成熟	.41***	.51***	.46***	.46***	.38***	.49***	.45***	.50***

注 *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

多変量重回帰分析の結果から、加齢に伴って生じる転機とそれに伴う自己変容（本研究では“志向の転換”が該当）、および衰えから自己評価に対するネガティブな影響が見出され、仮説と一致した。

各群に現れた発達の特徴を詳細に見ていきたい。有意な変数が多かった男性の中年前期とポスト期、そして女性の中年前期は、老いの多側面から自己の多領域への影響が見られたが、中でも衰えと“志向の転換”の影響が顕在化する時期であった。40代である中年前期は衰えからの影響が顕著である。男女とも衰えによる外見・健康双方の自己評価の低下が最も見られると言ってよい。Whitbourne (2002) は老いによる影響は端緒の40代において最も顕著であると指摘するが、本研究の結果も軌を一にし、中年前期が、人生初めての衰えによる自己評価の低下に特徴づけられる“危機”の時期であることが示された。ところが、男性において、定年退職期である中年後期ではなくポスト期に老いからのネガティブな影響が広範囲に見出された点は、仮説5および先行研究との間にずれが認められた。この点は“志向の転換”と併せて論じたい。男性における“志向の転換”は、前期・後期・ポスト期を通じて自己の社会面・経済面を中心に有意な影響を及ぼしていた。退職期にあたる後期は係数の値が最

も高くその影響力が窺えたが、社会・経済面に限定しての効果であった。それに対してポスト期では、“志向の転換”の影響は自己の内面に対する評価にまで及び、心理機能の低下と社会や世間からのずれや取り残され感を指す“心理社会面の減退”の有意な影響が併存していた。この結果を解釈すると、退職期である後期の老いは、退職という社会的変化に焦点化して経験される、しかし、ポスト期に入ると、心理面の機能低下や社会の一線から退いた実感によって喚起される自己評価の低下も加わる、と考えられる。よって、男性における退職をめぐる“危機”の様相とは、退職という転機に伴う社会・経済面の評価の低下が見られる後期、そして、退職による社会からのずれや隔絶を感じることが加わり、自己評価へのネガティブな影響が積み重なるポスト期の2段階からなると理解されよう。前期においても“志向の転換”は社会面・内面・経済面に有意な影響を示しているが、こちらは、昇進や出世の限界などによって仕事に対する考え方や意味づけ、時間・関与の配分などが変化すると知見(Levinson, 1978)に対応する。以上をまとめると、男性では、とくに社会・経済面の自己領域において老いからの有意な影響が見られやすく、老いの多側面からのネガティブな影響が重なることによって“危機”的

様相が生じると説明される。

一方、女性の場合、“志向の転換”すなわち加齢に伴う転機によって生じた自己変容の影響は30代であるプレ期に示された。この結果は、女性においては結婚や出産をめぐり、30代で社会的役割に関する選択を迫られるためと理解される (Helson, 1997)。その後、中年前期以降の女性における“危機”の様相は、衰えによって自己評価が全般的に低下する現象と約言される。中年前期は、人生最初の身体面・心理社会面の衰えに初めて直面することに呼応し、数多のネガティブな影響が見られる。この点は男性と同様である。しかし、中年後期では“心理社会面の減退”が、ポスト期では“身体の不調”が、全自己領域に対してネガティブな影響を示すという独自の様相をもつ。これは、身体面や心理面の一部に生じた衰えの影響が自己領域全体の評価を低下させると言い換えられる。プレ期 (“志向の転換”の影響)、前期 (衰え2相の影響) も同様の解釈が可能であることから、このようなメカニズムは中高年期女性全体に見られるのではないかと推測される。部分的に生じた衰えが自己評価全般を低下させる状態とは、“well-being の逆説”で論じた、老いのネガティブな影響の限局化・最小化が不全な状態と見なし得る。中高年期において、高 well-being を維持するための方略 (補償を伴う選択的最適化, Baltes & Baltes, 1990) が十分に機能するには、自己の各領域を個別的かつ明確に把握することが前提となることを考慮するとき、女性における“危機”の様相とは、30代では社会的転機、40代以降では衰えによるネガティブな心理的影響が波及し、自己評価が全般的に低下するリスク状態として説明しようと思われ

総合的考察

本研究では、先行研究で指摘されてきた“well-being の逆説”と“危機”を、老いと自己評価との関連からとらえることを通し、中高年期の発達を検討した。事前の仮説がほぼ支持されたことから、老いが自己評価を規定する中で中高年期の発達が進展するという本研究の理論的枠組みが有意味であることが示唆された。“well-being の逆説”をめぐることは、本研究においても、老いの進行と自己評価の維持・上昇が同時に認められ、その形成要因として、老いの肯定面によるポジティブな影響、ならびにネガティブな影響の最小化という機序の存在が示唆された。また、“危機”は、中高年期特有の転機、それに伴って生じる自己変容と衰えによる自己評価の低下として現れ、中年前期において最も顕著に観察されることが明らかになった。また、男性では、中年前期・ポスト期における多種類の老いからのネガティブな影響の累積、女性では、年齢段階によらず、老いのネガティブな影響の波

及によって“危機”が生じることが示唆された。

本研究は、老いが、中高年期の well-being を支える重要な要素として、また“危機”の契機としての役割を担うことを実証的に示した。ここから、老いそのものが中高年期の発達を促進する要因であることが示唆され、老いの積極的機能が明確化されたと言える。他方、老いのポジティブ・ネガティブ両面の影響を領域個別的な自己評価からとらえたことは、“well-being の逆説”と“危機”双方へ同時にアプローチすることを可能にした。本研究の知見からは、高 well-being を支える機序が不全な場合、“危機”に相応するリスク状態が生じると示唆された。これまで独立に存在していた成人発達に関する多くの知見を統合し得る視点として、今後の検討が注目される。

ところで、男女で独自の様相が見られた“危機”の結果においては、自己概念の成人発達に関するさらなる考察が可能である。男性では、老いと自己評価との対応は対象となる領域を介して比較的明確であり、限定された影響が示された。時期も身体的・社会的変化が明確な中年前期・ポスト期に特定されていた。これらは老いと自己領域との関連が本来的にもつ性質に由来する結果と言え、多くの先行研究 (Levinson, 1978) との一致も肯ける。それに対して、多面的に構成される自己概念を個別的・明確にとらえる傾向が“危機”の規定因となり得るとの女性に関する知見は、従来の成人発達研究には例を見ない。Campbell (1990) は、自己に注目し、明確かつ個別的に認識する自己概念の次元を明確性 (clarity) と呼び、精神的健康との関連を指摘している。彼女の言によれば、明確性はパーソナリティ特性に類する。ならば、女性における“危機”とは、発達過程において時期を特定して定型的に現れるものとしてではなく、個人差の一端として理解されるべきかもしれない。男女の発達経路の違いを説明し得る興味深い仮説であるが、これ以上の推測を重ねることは避け、今後さらなる検討を経た上で改めて議論したい。

一方で、本研究の限界として、得られた発達の知見がすべて横断モデルによるものである点を言明しておかねばならない。加えて、本研究は、老いと自己評価という限られた変数を用いた検討であり、自己概念のもつ過程としての側面 (遠藤, 1992)、老いの各側面の間における相互性や連動 (Whitbourne, 2002) などを考慮していない。今後、自己概念の独立性と老いの相互性双方を考慮するモデル構築によって、中高年期の発達を包括的に描き出す工夫と、継時的な変化をとらえられる縦断研究を採用した検討を追加する必要がある。

引用文献

- Baltes, P. B. (1987). Theoretical proposition of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, **23**, 611-626.
- Baltes, P. B., & Baltes, M. M. (Eds.) (1990). *Successful Aging: Perspectives from the behavioral sciences*. New York: Cambridge University Press.
- Brandstädter, J., & Greve, W. (1994). The aging self: Stabilizing and protective process. *Developmental Review*, **14**, 52-80.
- Campbell, J. D. (1990). Self-esteem and clarity of the self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59**, 538-549.
- Carstensen, L. L., & Freund, A. M. (1994). Commentary: The resilience of the aging self. *Developmental Review*, **14**, 81-92.
- 遠藤由美 (1992). 個性化された評価基準からの自尊感情再考 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽(編) セルフ・エスティームの心理学——自己価値の探求—— ナカニシヤ出版 pp. 57-70.
(Endo, Y.)
- Erikson, E. H. (1968). *Identity: Youth and crisis*. New York: Norton.
- Gilligan, C. (1982). *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Boston: Harvard University Press.
(ギリガン, C. 岩男寿美子 (監訳) (1986). もうひとつの声 川島書店)
- Heckhausen, J. (2001). Adaptation and resilience in midlife. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development*. New York: John Wiley & Sons, Inc. pp. 345-394.
- Helson, R. (1997). The self in middle age. In M. E. Lachman & J. B. James (Eds.), *Multiple paths of midlife development*. Chicago: The University of Chicago Press. pp. 21-43.
- 伊藤忠弘 (2002). 自尊感情と自己評価 船津衛・安藤清志(編) ニューセンチュリー社会心理学 I 自我・自己の社会心理学 北樹出版 pp. 96-111.
(Ito, T.)
- Lachman, M. E., & Bertrand, R. M. (2001). Personality and the self in midlife. In M. E. Lachman (Ed.), *Handbook of midlife development*. New York: John Wiley & Sons, Inc. pp. 279-309.
- Levinson, D. J. (1978). *The seasons of a man's life*. New York: The Sterling Lord Agency, Inc.
- Mroczek, D. K., & Kolarz, C. M. (1998). The Effect of age on positive and negative affect: A developmental perspective on happiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1333-1349.
- 内閣府(編) (2004). 高齢社会白書平成 16 年版——暮らしと社会シリーズ—— ぎょうせい (Cabinet Office)
- 岡本祐子(編著) (2002). アイデンティティ生涯発達論の射程 ミネルヴァ書房 (Okamoto, Y.)
- 下仲順子 (1999). 老化の心理学的アプローチ 折茂肇(編) 新老年学 (第 2 版) 東京大学出版会 pp. 1325-1340.
(Shimonaka, Y.)
- Stevens, J. (2002). *Applied multivariate statistics for the social sciences*. 4th ed. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- 豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析 (入門編)——構造方程式モデリング—— 朝倉出版 (Toyoda, H.)
- 若本純子 (2003). 老年前期における心理的適応と規定因——主観的老いの経験, 主観的年齢, 多次元的自己に注目して—— お茶の水女子大学 21 世紀 COE プログラム “誕生から死までの人間発達科学” 平成 14 年度公募研究成果論文集, 237-248.
(Wakamoto, J. (2003). Psychological adjustment and its regulatory factors of young olds: Focusing on subjective experience of aging, subjective age and multidimensional self. *Ochanomizu University 21st COE Program Annual Bulletin on Studies of Human Development from Birth to Death, Division of Young Scientists*, 237-248.)
- 若本純子・無藤 隆 (2004). 中年期の多次元的自己概念における発達の特徴——自己に対する関心と評価の交互作用という観点から—— 教育心理学研究, **52**, 382-391.
(Wakamoto, J., & Muto, T. (2004). Developmental characteristics of multidimensional self-concept in midlife: In light of interaction between concern and evaluation in domains of self. *Japanese Journal of Educational Psychology*, **52**, 382-391.)
- 若本純子・無藤 隆 (2006). 中高年期における主観的老いの経験 発達心理学研究, **17**, 84-93.
(Wakamoto, J., & Muto, T. (2006). Subjective experiences of aging in middle and late adulthood. *Japanese Journal of Developmental Psychology*, **17**, 84-93.)
- Whitbourne, S. K. (2002). *The aging individual physical and psychological perspectives*. 2nd ed. New York: Springer Publishing Company.